**別添資料**

# 第１学年１組　生活科「いっしょにあそぼう」の実践から

友達や園児との関わりを通して、相手のことを想像したり、伝えたいことや伝え方を選んだりすることができるとともに、関わることのよさや楽しさを実感し触れ合おうとする子ども

## １　はじめに

コロナ禍の状況が続く中、教師は「子ども自身がやりたいことを実現していく単元づくりの難しさ」を感じていた。１年生の５月、２年生と一緒に学校探検をする計画だったが、直前で中止（感染症対策のため）になった。そんな中、１年生だけでの学校探検が始まった。すると「誰が植えたのかな？」と中庭に咲くチューリップを観察する子どもや、噴水の周りで「水スタンプおもしろい」と水遊びをする子どもなど、思い思いの外遊び探検が始まった。遊び終えた子どもたちは「もっと外探検をしたい」と話した。こうして「あそびけんきゅうたい」の単元が始まり、学校探検は別の月に移すことを子どもたちと話し合った。また教師が、子どもにとっての「遊び」の魅力を確認した瞬間でもあった。このような経緯から「遊び」を中心にした年間カリキュラムを見直そうと考えた。

## ２　自己実現する楽しさを感じる「あそびけんきゅうたい（１学期）」

単元終末（６月末）、雨の中の活動だった。そんな中子どもたちは、選んだ道具をスキップしながら運んだり、駆け足でお気に入りの場所へ向かったりと「早く遊びたい」という思いが高まっていた。楽しみながら道具を選んだり、遊ぶ場を選んだりした子どもたちは、今日やりたいことをイメージしながら活動に入り、迷いなく遊び出していることが分かった。単元終末に、このような子どもの姿が見られたのは、単元を通して繰り返す活動があったからだと考える。繰り返す活動の中で、その遊びの面白さに気付いたり、学校の中のお気に入りの場所を見出したりと、子どもたちは次第に自分の居場所を確立し、やりたいことを夢中になって遊ぶ楽しさを感じるようになっていったと考える。また活動する度に、子どもたちの思いの中には「前よりもパワーアップしたい」という自分自身の成長につながる思いも芽生えていると分かった。そのことを踏まえて、２学期の「遊び」を中心にした単元は、他者（身近にいる同学年や近隣の園児、上級生等）との関わりを入れて構想した。

早く！早く！

わあ！いつもより流れる！！

## ３　いっしょにあそぼう（１年２組編）

２組との外遊びが始まると子どもたちは、自分の好きな木の実料理を相手（２組）に伝えながら作ろうと道具を選んだり、得意な泥実験をしたりして一緒に楽しみたいと活動し出した。正春は、自分から鬼遊びに誘おうと優しく話すことを意識していた。しかし、活動の中で自分の思いが伝わらず２組の子どもとの関わりに悩む場面があった。教師は「どうしたの」と正春に話しかけつつも、見守ることにした。すると、一緒に遊んでいた１組や２組の子どもも正春に「どうしたの」「大丈夫だよ」などと話しかけ始めた。この日の正春の記録カードの題名は「楽しい時もあるし、楽しくない時もある」という本音を表すもの

なんで、ぼくの話を
聞いてくれないの

だった。このことから教師は、正春のように自分の思いが相手に伝わらず悩む子どもや自分だけの思いで相手との関わりを意識せず活動している子どももいるのではないかと考えた。そこで、２組との交流の楽しさだけでなく、難しさも振り返る授業を入れて、次の園児との交流につなげることにした。

## ４　いっしょにあそぼう（にじ組編）

園児との交流に向けて、これまでの外遊び自体や相手との関わりを踏まえ、学級全体で問いを共有した。（『問い：自分も にじ組も 楽しい計画に したい』）その後子どもたちは、にじ組との活動を想定し男女隔てなくグループをつくり、遊びの計画を始めた。

Ｃ２が見ていた活動写真

Ｃ１　正春君はどんな計画がいいと思う？
正春　けんかをしないとか、ルールを守る。
Ｃ２　あれだね。（正春が２組との関わりで悩んだ時の写真）
Ｔ　　どんなふうに遊ぶの？
Ｃ２　もしけんかをしたら、なでなでするのはどうかな。
正春　こうだね
　　（自分の背中をさする様子をグループの子に見せる）
Ｃ３　その次は、自己紹介も大事だよね。
Ｃ４　砂遊びをしたいって言ったら一緒にやるのはどう？
正春　いいね。このことをメモに書こう！

正春君の考えもいいね！

一見、何気なく集まった正春のグループだったが、正春の悩みに共感して相手と仲よく関わりたいという思いのあるグループだと分かる。その後もグループでの意見交換は続き、どのグループもにじ組との交流への思いを高めていった。数日後のにじ組との遊びでは、子どもたちなりに相手のことを考えて関わる交流活動になった。

## ５　おわりに

にじ組との交流を終えた正春の記録カードには『色んな人と遊んだよ』とあり、これまで夢中になって遊んでいた川作りを園児と一緒にできたという満足した思いがあった。

わたしの（にじ組と遊ぶ）作戦はね…

生活科の各単元の中で自分自身と人、もの、こととの関わりが欠かせない。また「前よりもパワーアップしたい」という子どもの思いを学びとしてつなげるためにも、他者との関わりを取り入れた単元構成をしてきた。ただし、昨今の情勢は、他者との交流を自由に行うことが難しい状況（感染症対策のため）でもある。子どもの他者に対する思いが高まっても、中止になることが多かった。少ない交流活動でも、子どもたちが本気で自分自身のことを振り返ったり、相手のことを考えたりできる機会をつくりたいと教師は考えてきた。しかし、子どもがやりたいことと教師の考えの間にずれが生じることもあった。そのために教師は「高鳴る学び」を意識しながら、子どもの思いが高まるまで根気強く活動を繰り返し、ここぞという時に自分や相手の思いを共有する時間を設けてきた。時間はかかるが、正春やその周りにいる子どもの姿から、本気で自分や友達の考えと向き合い、遊び続けたいという子どもらしい思いを感じることができた。今後も、時間をかけながら、自分の学級に合う単元構成にしていきたい。